

思
い
出
す
人
々



西山 厚 全24回

第6回 【正岡子規】

明治28年（1895）10月26日、28歳の正岡子規は奈良に来て、東大寺に近い對山楼たいざんろうに泊まった。

夕食のあと、「梅の精霊」のような16〜17歳の「下女」に皮をむいてもらい、大好物の柿を食べていると、東大寺の鐘が鳴った。

そのあと法隆寺でも同じような体験をしたのか、あるいはこの句の風情は法隆寺のほうがしっくりくると思ったのか、「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」の句となつて広く世に知られている。

子規は夏目漱石にお金を借りて奈良に来た。そして興福寺・東大寺・春日大社・般若寺・法華寺・西大寺・垂仁天皇陵・葉師寺・唐招提寺・法隆寺と、精力的に奈良を巡った。しかし、これが最後の旅となる。

半年前、子規は中国へ行き、帰りの船で咯血した。そして神戸の保養所ですばらく療養する。その時に作ったのが、2万3千もあるという子規の句のなかで、私が一番好きな句だ。

六月を綺麗な風の吹くことよ

当時、結核の患者は潮風に当たるといいと言われていた。「綺麗な風」は、須磨の海岸の潮風だった。